

第5回 観峰館オンライン講座

硯の洗硯鑑賞

2021年5月30日（日）14時00分～

講師；寺前公基（観峰館学芸員）

◇講座の目的◇

- ・ 硯の鑑賞方法について
- ・ 硯の魅力
- ・ 硯の洗硯鑑賞

硯の歴史

現代の硯に近い意味を持つ「硯」は、中国・漢時代の初め頃に生まれました。漢時代の硯は、磨板と呼ばれる長方形の粘板岩で、球状の墨の塊を、**磨石**（すりいし）を用いて磨りつぶしていたと考えられます。

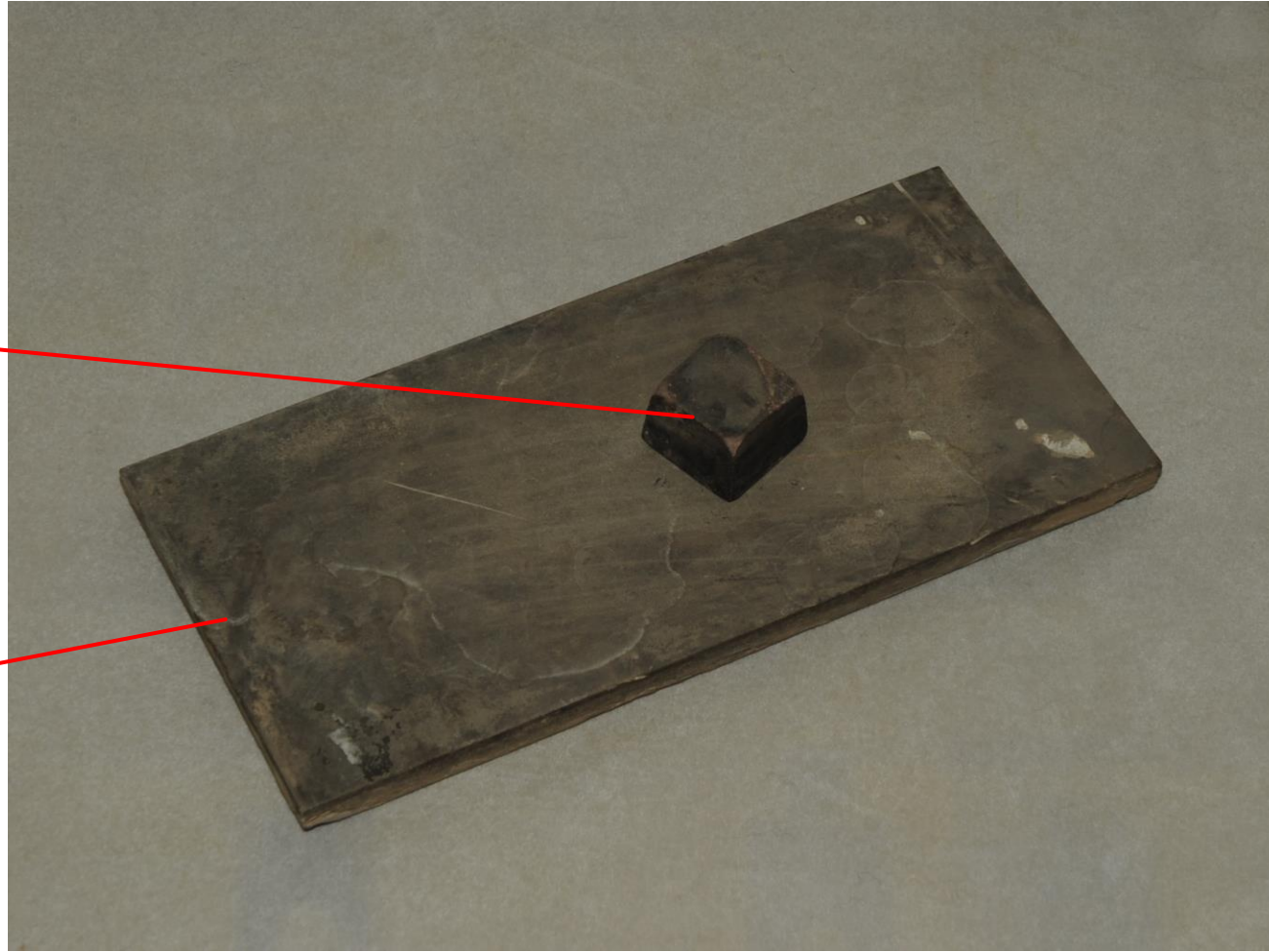
唐時代に入ると、学問・芸術の急速な発展、書や詩文の文化の繁栄を受けて、筆・硯の需要が増加すると、人びとは良い硯を探し求めるようになります。唐時代の硯は、まず**瓦硯**（がけん）・**陶硯**（とうけん）が大部分を占め、続いて石硯が広く用いられるようになり、**歙州**（きゅうじゅう）、**端溪**（たんけい）などの硯材が尊ばれるようになりました。

特に端溪は、明代・万暦年間に良い硯材が産出されるようになると、硯そのものの芸術性が認識されるようになり、優美な彫刻が施され、鑑賞の対象として愛玩されるようになりました。

漢時代の硯板と磨石

磨石

硯板



瓦硯と陶硯



(左) 銅雀台瓦硯

(右) 獸脚円面陶硯



端溪硯とは？

端溪硯は、中国・広東省肇慶(ちょうけい)市高要区に流れる西江の支流に臨む、斧柯山を中心とする辺り一帯より産出する硯石をさします。硯といえば端溪というほど、端溪の名前は「良硯」の代名詞として使われます。

その石質は、鋒鋦(ほうぼう、硯の表面にある墨を磨るための粒子のこと)が強く長持ちし、硬度が適当で磨墨の状態が良く、その石色は、紫色を基調とし、水に濡らした時には色彩が著しく変化します。端溪硯の中でも、魚腦凍(ぎょのうとう)、氷裂紋(ひょうれつもん)、火捺(かなつ)など、端溪特有の斑紋(はんもん)(表面に見える文様のこと)があるものや、黄、碧、緑色の層を成す眼(がん)があるものが、良質の硯として高く評価されています。

端溪硯



(左) 端溪仔石硯



(右) 端溪梅花坑硯板

歙州硯とは？

歙州硯(きゅうじゅうけん)は、江西省(こうせいしょう)から安徽省(あんきしょう)にかけて産出する硯石で、記録によると、黄山山脈の支脈である竜尾山(りゅうびざん、羅紋山ともいう) 一帯の峡中にある数多くの硯坑(けんこう)から名材が採掘されたといえます。

その石質は、鋒鋇が極めて強く、**表面に石層がはっきりと認められます**。石色は、**黒色**を基調としています。斑紋は「金星(きんせい)」・「金暈(きんうん)」など金銀色のものや、「**羅紋**」と呼ばれる薄い絹織物を重ねたような、青黒い細い糸のような線、黒や白色の小点が前面に出ている「魚子紋(ぎょしもん)」などが表面に鮮やかに見えます。

唐時代から宋代にかけて、端溪硯と同等あるいはそれ以上の評価を得ており、歙州特有の石色、渋い斑紋、素朴な硯式は、文人たちに愛玩されていました。

歙州硯



(左) 歙州月兔硯



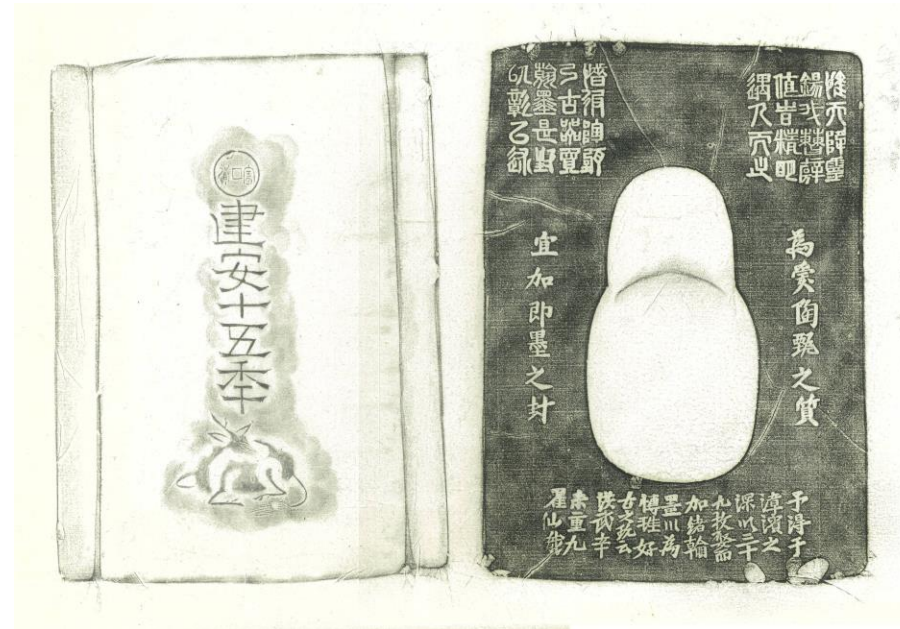
(右) 歙州角浪羅紋硯

硯の魅力ー銘文（めいぶん）ー

展示の硯の中に、銘文(めいぶん)が彫られているものがあります。銘文の作者は、硯の所有者、硯の鑑識(かんしき)を行った人物などですが、中には、著名な書画家の漢詩なども彫られています。従って、銘の有無によって、硯の価値も大きく変わっていきます。硯だけでなく、硯の箱にも銘文が彫られていることがあります。それらは、硯の伝来を調べる際に、貴重な情報となります。

多くの硯が黒紫色であり、また経年による摩滅(まめつ)のため、銘文がはっきりと読めないものは、拓本(たくほん)を採ることをおすすめします。拓本は、写真では分からない硯の魅力を伝えてくれます。

硯の拓本



(上) 銅雀台瓦硯
(下) 鷹硯 (張照銘)

こんな硯もあります・・・



(左) 石筍硯 表面



(右) 同 裏面

洗硯とは？

本来、「洗硯」という言葉自体は文字通り、硯を洗い清めることですが、硯の場合、水中に浸すと石の紋様などが分かりやすいため、その鑑賞行為を特に「洗硯」といい、愛好家などが行う硯の鑑賞会を「洗硯会」と呼ぶ。

現代の洗硯会では、水を張った盆や桶などに硯を浸して鑑賞することがある。



(左) 同 水中の様子



(右) 西遊三蔵硯

それでは、
実際の硯、洗硯の様子
を見てみましょう！

今日の講座のおさらい

(動画をご覧ください。)

ありがとうございました。

観峰館